

# 人権つうしん

手をつなぎ 心ふれあう 明るい社会  
(同和教育つうしん第8号より)

通算45号 平成25年(2013年)6月3日

発行 長野県教育委員会教学指導課心の支援室  
発行人 永原 経明

〒380-8570 長野市大字南長野字幅下692-2

電話 026-235-7450

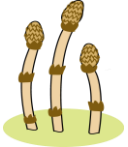
FAX 026-235-7495

Eメール kokoro@pref.nagano.lg.jp

★ 人権つうしんは、教育委員会ホームページでもご覧いただけます。

→<http://www.pref.nagano.lg.jp/kyouiku/kyougaku/jinken51.htm>

## 「感じ 考え 行動する」学びをめざして



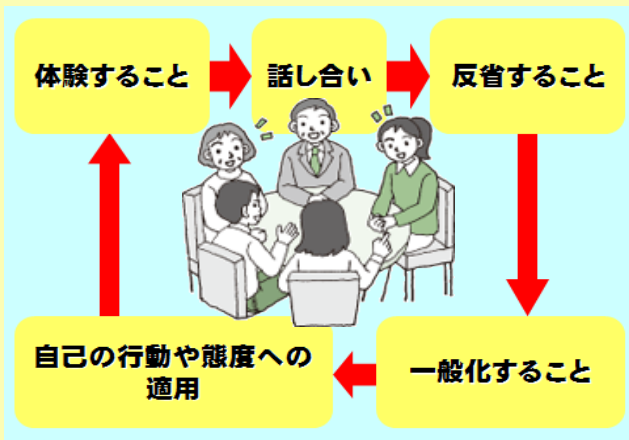
本県では、人権教育のより一層の充実を図るために、それぞれの地域やコミュニティにおいて「地域リーダー」が中心となって推進する研修会や講座などの「学習の中身」や「学び方」を大切に考えています。これまでの研修会では、参加者の皆さんから、「また人権の研修会か。もう遠慮したい」、「講師の一方的な話を聞くだけの学習会にはうんざりしている」などと、学習内容や方法などに対する批判や否定的な声が多く聞かれました。このような声は、人権教育(学習)が「他人事」であったり、「受け身的」になっていたりするなど、自分の問題として捉え、自らの生き方を問い直す学習になり得ていなかったことに起因していると考えられます。

そこで、これまでの社会教育の中で培われてきた学習の手法や成果・課題を整理し、参加者一人一人が「人権課題」を自分の問題として受け止め、主体的に学び合う学習教材や学習形態を創出していく必要があります。「第三次とりまとめ<sup>(註)</sup>」の中でも、「自分の人権を守り、他者の人権を守ろうとする意識・意欲・態度を促進するためには、言葉で説明して教えるというような学習方法には限界があり、自ら『感じ 考え 行動する』こと、つまり、自身の心と頭脳と体を使い、主体的、実践的に学ぶことが不可欠である」と記されています。それにはまず、「地域リーダー」が地域の実情に応じた(特にマイノリティーの立場にある当事者や家族のニーズに寄り添った)研修会や学習講座を開設していくことが大切です。そして、参加者が「体験」することを通して、主体的に「参加」し「協力」しながら学び合う学習展開を構想していくことが求められています。<sup>(註)</sup> 平成20年に文部科学省から公表された「人権教育の指導方法等の在り方について」より



【互いの考えや思いを交流し合う学習】

### 「感じ 考え 行動する」学びとは? ～体験を基礎とする学びのサイクル～



#### 【体験すること】

・当事者が抱え込んでいる事実や背景と出会い、関わり合う場面です。はっとして、自分の人権感覚が呼び覚まされる瞬間があります。(ロールプレイ等の疑似体験を含みます)

#### 【話し合い】

・語り合いの場面です。相手(他者)や自分自身と向き合いじっくりと対話します。

#### 【反省すること】

・ふり返りの場面です。これまでの自分のあり方や生き方への問い直しが行なわれます。

【一般化すること】 ・ふり返ったことを活かして、「こういう時はこうしていこう」「これからはこのようにしたい」などと、これからの社会のあり方や自分の生き方を思い描く場面です。

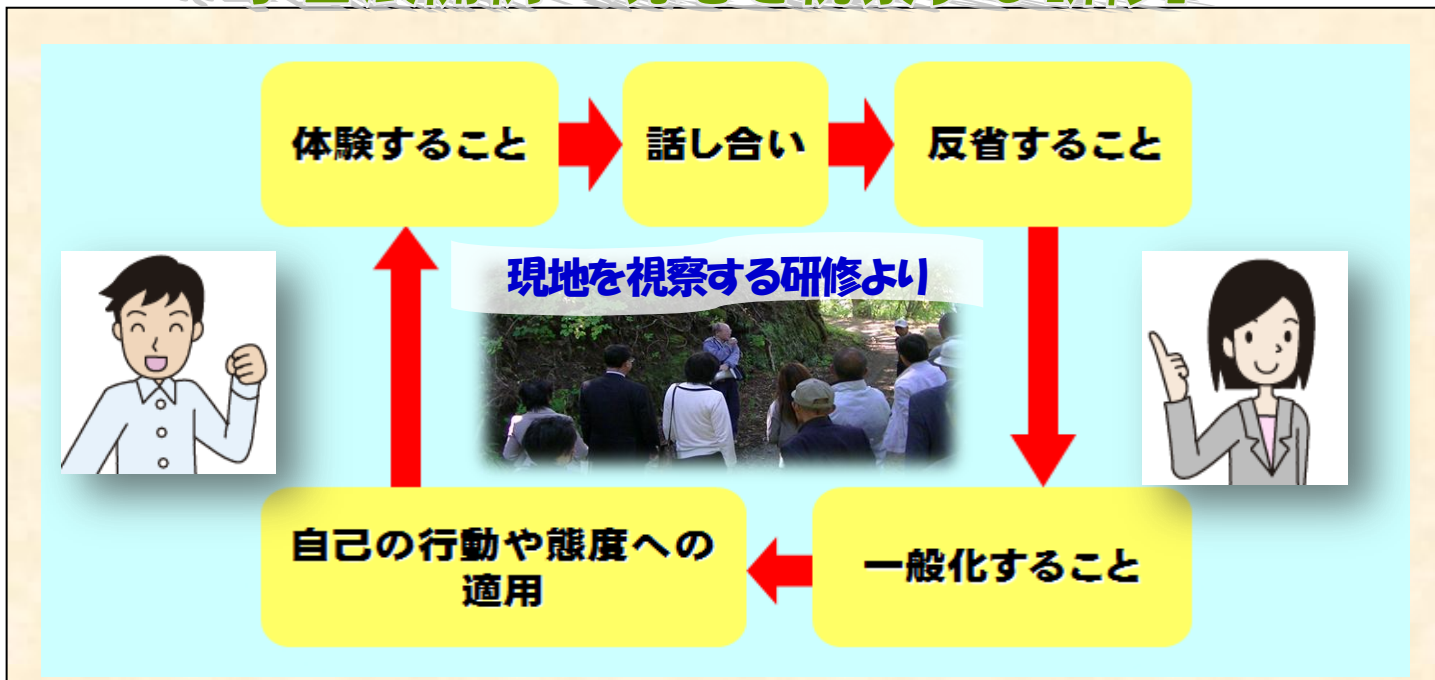
【自己の行動や態度への適用】 ・「実践的行動」へと踏み出す場面です。




今後も各種研修会にて、学習効果を高め、人権意識の高揚を図るために、地域に根ざした人権課題に目を向けながら、「感じ 考え 行動する」学びを推進することができる「地域リーダー」の育成に努めていきたいと考えています。

# 「協力」しながら学び合う学習の実際

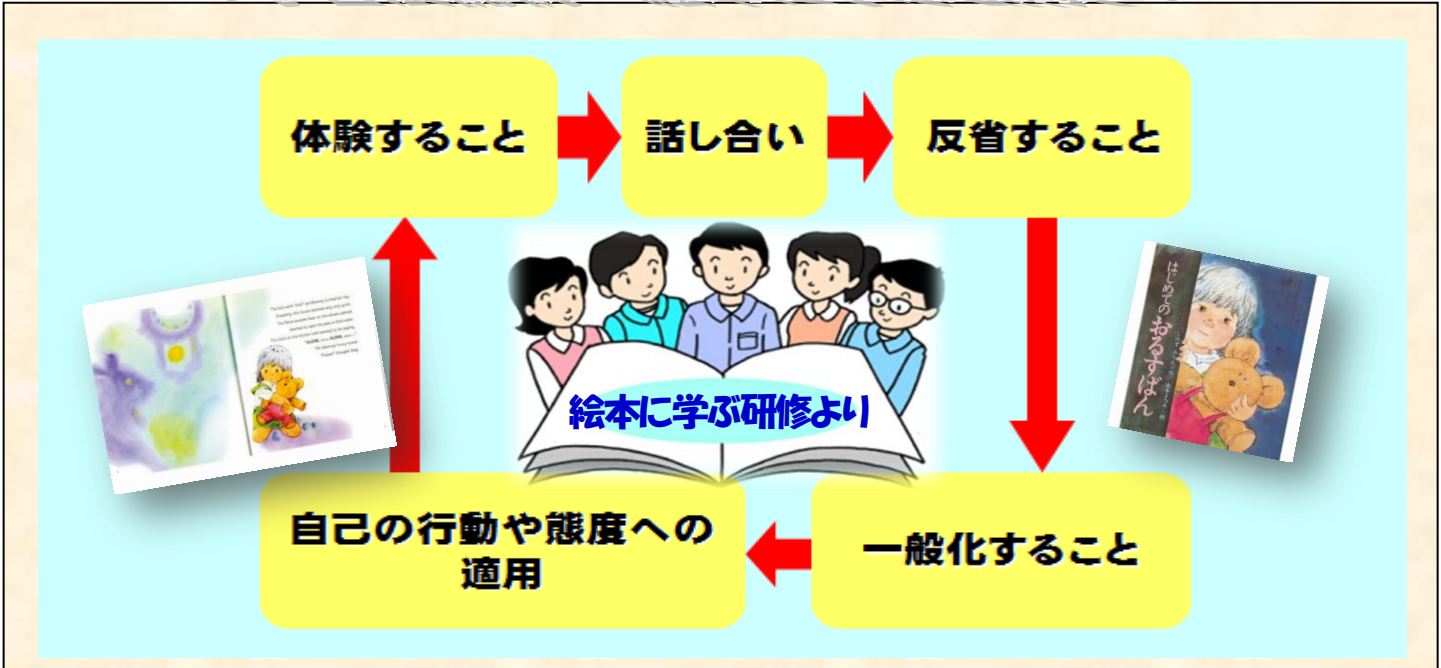
## \*学習展開例「現地を視察する研修」\*





学習過程	学 習 活 動	留 意 点 など
<p>研修テーマ：「五郎兵衛用水」の現地見学を通して、人権問題に関わる歴史について学び合う。</p>		
1. 体験する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 講師の斉藤洋一さん（信州農村開発史研究所所長）に説明や案内をしていただきながら、五郎兵衛用水を歩いてたどる。</li> <li>○ 数十メートルに及ぶ厚い岩盤を貫いて、谷から谷へと連なり流れる五郎兵衛用水に出会い、掘削工事や石切作業に高度な技術が駆使されていた事実を知る。</li> </ul>	 <p>〈五郎兵衛用水を歩いてたどる〉</p>
2. 語り合う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 現地見学をしながら、参加者同士で、感じたり考えたりしたことを語り合う。</li> <li>○ 五郎兵衛用水を観察する中で、歴史的な事実や背景を想像する。</li> <li>○ 不当な差別と闘いながら、五郎兵衛用水の開発事業に携わった先人たちの労苦や奮闘ぶりに思いを馳せる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「語り合う時間」を特設するのではなく、参加者がまわりの人や自分自身と自然と対話し合う時や場を大事にする。</li> </ul>
3. ふり返る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 不当な差別と闘いながらも開発事業に携わってきた先人たちの姿と、今ある自分の姿を比べてみる。</li> <li>・何も知らず、何もしていない自分がいたのではないだろうか。</li> <li>・不当な差別を受けてきた人たちに対して、「不憫だ」「可哀想だ」などと、偏った見方・考え方をしていなかっただろうか。</li> </ul>	 <p>〈先人の労苦に思いを馳せる〉</p>
4. 一般化する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ これからの「自分の生き方」や「社会のあり方」について思い描く。</li> <li>・さらに歴史的な事実や背景を学んで、偏見をなくしていきたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 正しい理解と認識が深まるように支援する。</li> </ul>
5. 適用する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 日常生活の中で、具体的な態度や行動にあらわしていく。</li> <li>・学んだことを家族と共有し、まずは家庭の中で実践する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 体験を基礎とする学びを意識化する。</li> </ul>


# 「体験」することを通して、主体的に「参加」し

## \*学習展開例「絵本に学ぶ研修」\*



学習過程	学 習 活 動	留 意 点 など
<p>研修テーマ：絵本「はじめてのおるすばん」のお話をもとに、子どもの人権について学び合う。</p>		
1. 体験する。(注)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 絵本「はじめてのおるすばん」を読み合う。</li> <li>□一人で読む □役割分担して読む (ペア読み、グループ読み)</li> <li>○ 絵本に描かれている内容 (登場人物やその行為) について知る。</li> </ul>	 <p>〈絵本をじっくり読み合う〉</p>
2. 語り合う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 絵本を読んでみて、感じたり考えたりしたことを、小グループで語り合う。</li> <li>○ 3歳の子ども (みほちゃん) がはじめてお留守番をする状況や様子を目を向けて、様々な立場から意見を交流し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ それぞれの登場人物について考える。</li> </ul>
3. ふり返る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「自分が子どもだったら」「自分が親だったら」という視点で見つめ返してみる。</li> <li>・ 3歳の子どもにとって「一人でお留守番」という状況は、親が想像する以上に危険なのではないか。</li> <li>・ もしかすると「児童虐待」につながる危険もあるのではないか。</li> </ul>	 <p>〈様々な立場から意見交換する〉</p>
4. 一般化する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ これからの「自分の行動」や「社会のあり方」について考える。</li> <li>・ いつも「子どもの側」に立って考えていくようにしていきたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 正しい理解と認識が深まるように支援する。</li> </ul>
5. 適用する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 日常生活の中で、具体的な態度や行動にあらわしていく。</li> <li>・ 家庭や地域の子どもたちと過ごす時間や会話を大事にする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 体験を基礎とする学びを意識化する。</li> </ul>

(注) 「体験すること」・・・当事者との交流やフィールドワークなどの「実体験」と、絵本や物語の役割演技やロールプレイなどの「疑似体験」があります。場合によっては、効果的なビデオ鑑賞 (参加者の気持ちを揺さぶるようなビデオ鑑賞など) を「体験」として位置づけることもあります。





シリーズ

# はっとしたその瞬間(とき)

## 「会いたくない…」その言葉の意味をめぐって

—地域に住んでいるお年寄りとの「出会い」と「交わり」より—



淋しい気持ち、分かるような気がする

中学二年の美里さんは、不登校傾向の生徒でした。朝が苦手で、登校しても遅刻することが度々ありました。疲れがたまりやすく、保健室にお世話になることも何度もありました。その美里さんが、夏休みに担任の私を訪ねてきました。



\*美里さんと教師との会話より\*

(美里) 先生、びっくり。この前、一人暮らしのお年寄り(峯さん)に手紙出したらですよ。その返事がきたんだよ。

(私) それはよかったじゃん。何て書いてあったの？

(美里) 私の「物語」を応援してくれたよ。それからね、すごく淋しいって書いてあった。私も淋しいから、その気持ち少し分かるような気がする。

(私) そうか。それなら、その気持ちを綴って返事を出したらいいかもね。

(美里) うん。でも、私はね、淋しい気持ちがちよつとでもなくなるように歌を送ってあげたいな。

(私) おつ、それはいい考えだね。クラスの歌を録ったCDでも送る？

(美里) うん。それでもいいんだけど、できれば直接聞かせてあげたい。

(私) 美里さんは、峯さんの「淋しい」っていう気持ちが、自分と似ているような気がして放っておけないんだね。

(美里) うん。

(私) 「歌を届ける」っていうアイデア、すごくいいなって思うよ。二学期になったらさ、クラスのみんなにも相談してみようよ。

(美里) うん。でも、強制じゃない方がいいよ。峯さんも嫌だと思っしね。



美里ちゃんお便りありがとうございます。物語を書いて居りますのね。良くてすね。えらいです。がんばって下さいね。私は何にも出来ないおばアちゃんになって淋しいです。皆様のお便りを楽しみにして居ります。

〈峯さんから美里さんに届いた手紙〉

そこで、私は、お年寄りとの交流(出会いと交わり)を、美里さんが中心となって計画・実行していけるようになれば、美里さんの中に「自尊心」や「自己肯定感」が芽生え、学校生活にも期待が持てるようになり、さらに、峯さんとの交流も深まっていくのではないかと考えました。

そして、社会協議福祉会の方(金山さん)の協力を得て、「美里プロジェクト」を立ち上げることにしました。

### 峯さんとの出会い



社協の金山さんの計らいで、夏休みのうちに、美里さんと峯さんの出会いが実現しました。

「峯さんが生活している『希寮』<sup>のせみ</sup>」に行ってみましょう。お年寄りがどのように生活しているのか、それを知るだけでも勉強になりますよ。」という金山さんからの提案を聞いて、美里さんは、少し不安げな顔を見せながらも、「峯さんは、どうして一人なのか。私だったら一人は嫌だな。」などと語り、「淋しい」と手紙に綴った峯さんに思いをめぐらせていきました。

(次頁へ)

「お年寄りは、火の扱いが危険だね。『希寮』の中には、ガスを使って、そのまま忘れて火を出しちゃった人がいるんだよ。そういうお年寄りは村の中にいると危険でしょ。村全体が火事になっちゃうからね。だから、村から少し離れた『希寮』に入っている人もいるんだよ。」と、金山さんは話してくれました。

それを聞いていた美里さんは、「何かとっても淋しい話だな。私は、自分のおじいちゃんやおばあちゃんが生きていたら、やっぱり一緒に住んでいてほしい」とつぶやきました。

金山さんのお話の通り、「希寮」は村から離れた所にありました。こじんまりとした庭には、峯さんたちが育てているのでしょうか、スイカやナス、トマトなどの野菜がたくさん実っていました。



中に入ると、金山さんが「突然の訪問者」を入所者の皆さんに紹介してくれました。そして、明るい陽が射し込む談話室では、金山さんを中心に、和やかな会話が始まりました。

入所者は、全員で七人。美里さんは、恥ずかしそうにその空気の中に入っていました。

入所者の皆さんのお話を伺っていると、「峯さん」がどの人なのか、すぐに見当がつかまりました。峯さんは、自分から会話に加わっていくことは一度もありませんでした。



美里さんは、会話に耳を傾けているだけの峯さんの様子をじっと見つめていました。

「今、峯さんは淋しさの中で生きています。だから、少しでも元気になってもらいたい。」——そういった美里さんのおもいがひしひしと伝わってくるようでした。



二十分ほど経った時のことでした。突然、峯さんの口から「思いがけない言葉」が発せられたのです。

**\*峯さんの言葉より\***

この間、ちょこっとね、返事出したの。そしたらね、会いたいなんのって、言ってたつうけどね、そこまで嫌だよ。会ってね、あれしろって困るから。手紙だけならいいんだけど、会いたくないね…。

もちろん峯さんは、手紙の相手が、今、そこに居合わせている美里さん本人であることを知りません。

——なぜ峯さんは、「会いたくない」なんて発言したんだろう。手紙の返事に「おばあちゃんになつて淋しい」と綴った峯さんがどうしてそんなことを言うんだろう。——

私は、峯さんの予想外の話に言葉を失いました。

美里さんは、それからしばらくの間、下を向いていました。

それでも時折、顔を上げて、他のお年寄りののにこやかな素振りに、笑顔で答えようとしている美里さんでしたが、内心は余程ショックだったに違いないありません。

「何か聞きたいことある？」という私の声がけにも、「ううん。いい。」と力なく応じただけした。

希寮から出ると、美里さんは、「はあ…」と、深いため息をつきました。思い切つて、私は、美里さんに聞いてみました。

**\*美里さんとの対話より\***

(私) 美里さんへの手紙に「淋しい」って書いた峯さんが、どうしてあんなこと(「会いたくない」)って言ったのかな。

(美里) うーん。

(私) もう歌

やめる??

(美里) ……。



(次頁へ)

社協の金山さんが美里さんを勇気づけるように、次のように話してくれました。

**\*金山さんの語りより\***

あなたに返事を書いた峯さんはね、長い間一人っきりの生活をしてきたのね。だから、「淋しさ」が慢性的になって、逆に人を遠ざけるようになったらって…。私はね、希寮のお年寄りたちと集まって、たくさん会話をすることで、峯さんの心が少しずつ開かれていけばいいなあって思っているのよ。だから、どんどん「希寮」を訪れて、歌とか歌ったり、何かいっしょにやりとりしてね、若さを



金山さんの話を聞きながら、美里さんは、「歌は歌ってあげたい。でも、クラス全員で行くと、峯さんに負担がかかっちゃうと思うから、少人数で歌いに行ってみようと思う。それから、私

たちの中に後ろ向きな気持ちが少しでもあったら、そういうこと、峯さんにはすぐに伝わっちゃうと思うから、本当に気持ちがある人だけにしたいな。」と答えていました。



**峯さんとの交わり**

二期期最初の学級の時間。

私は、子どもたちに、「美里さんのおもい」と「峯さんとの出会いの様子」を伝えていきました。

すると、ほとんどの子どもたちが、「峯さんの『会いたくない』気持ちを無視して、無理やりいくのはよくないと思う。』『会いたくない』って言った峯さんの気持ちは本当だと思っから、私は歌いに行かない方がいいと思う。」などと、峯さんの「会いたくない」という気持ちに注目して語り合っていました。

その中で、「それでも歌いに行きたい。」と語る美里さんのおもいを受けて、「峯さんの気持ちは分からないけ

ど、私たちの歌を聞いて何か変わるかもしれない。」「美里さんの気持ちも何となく分かる。」などと、数名の子どもたちが美里さんとともに「希寮を訪れたい」と願っていました。

**\*訪問の様子へ一回目\***

その日、希寮では、峯さんを含め、四

人のお年寄りたちが待っていました。子どもたちは、「学級の歌」を緊張した面持ちで歌っていました。



歌が終わると、峯さんは、目を細めて嬉しそうに拍手を送っていました。そして、ぼそぼそとつぶやきました。

「ずいぶん上手だね。かわいいね、子どもたち。嬉しかったよ。」



歌い終えた美里さんは、喜んでいる峯さんの表情を見つめながら、ほっとした様子でした。

次の学級の時間。

子どもたちは、数名が希寮を訪れた時の様子を、VTRで見合っていました。そして、「最初は嫌だったかもしれないけど、私たちのことを受け止めてくれて、最後は笑顔で話してくれたから、訪問した価値はあったと思う。」「歌い終わった時に『かわいい』という言葉が出てきて嬉しかった。行ってよかった。」「峯さんは、『会いたくない』って言った時と、少し気持ちが変わったんじゃないかな。」などと、訪問してみたの感想を共有しながら、子どもたちは、自分の気持ちを作文に綴っていました。

**\*昌弘さんの作文より(抜粋)\***

美里さんたちに行ってもらったよかったなあと考えた。歌う前と歌った後の峯さんの表情が明らかに違っていったから。次回は、僕もいっしょに歌いに行ってみようと思う。





美里さんは、次のような感想を綴りました。

**\*美里さんの作文より(抜粋)\***

夏休みの時に私が先生といっしょに訪問した時と、今回、私たち八名が歌を届けに行った後では、峯さんの『会いたくない』気持ちあまり変わってないと思う。でも、歌っている間に、峯さんは何かを思い出していたんじゃないかな。歌った後に、峯さんの目を見たら、何だかよく分からないけど、なつかしそうな目をしていて。私は、峯さんの気持ちが何となく分かるような…、分かんないような…、そんな気がします。



峯さんに対する美里さんの気持ちや子どもたちの見方・考え方に、少なからず「変化」があることを感じた私は、もう一度、「希寮」を訪れてみることを、子どもたちに提案していきましました。

**「井田先生」のついで**

二週間後。

「峯さんの本当の気持ちを知って、これからの交流のあり方を考えたい」という願いのもと、全員の子どもたちが「希寮」を訪れて、自分たちの「持ち歌」を熱唱しました。

その日、「希寮」の談話室には、峯さんを含めて、七名の入所者の方々が集まっていました。

子どもたちは、目の前にいる峯さんの表情を感じながら歌っていきましました。



入所者の中には、ハンカチで目を押さえながら、精一杯歌う子どもたちの様子を見つめているお年寄りが何人もいました。子どもたちが歌い終わると、入所者の方々から、次のような感想が語られました。

**\*入所者の方々の感想より\***

・とってもすてきな声。きれいな声。もう感激して、涙が出てきて止まらなくなっちゃったよ…。

・やっぱり、混声っていうのは素敵だね。男の子は男の子、女の子は女の子で、特徴のある声でよかったよ。

それまでじっと黙っていた峯さんは、ホームヘルパーの水谷さんに感想を促されると、「上手だったねえ。」と、小声でつぶやくように語ってくれました。峯さんの顔が、少しほころんでいるように見えました。



「希寮」を後にした子どもたちは、「みんなが喜んでくれて嬉しかったし、私たちの方が元気をもらった。」「泣いてくれた人もいて、自分たちが訪問する意味を改めて感じる事ができた。」「峯さんの本当の気持ちはまだよく分からないけど、喜んでくれていたと思う。」などと、自分たちの

おもいを語り合い、「希寮」への訪問が、入所者の方々にとっても、自分たちにとっても、そして、峯さんにとっても、「意味があるもの」と実感していきましました。

私は、「子どもたちが、峯さんの心の内側や背景にしっかりと目を向け、峯さんその人を理解しようとしていくことに、訪問の価値を見出したい。そして、そのことを通して、峯さんの『淋しさ』に自分の『淋しさ』を重ねている美里さんに、クラス全員で心を寄せていきたい。」と、強く願っていきましました。

そこで、私は、峯さんと深く関わっているホームヘルパーの水谷さんに、子どもたちへ向けたメッセージを書いていただくことにしました。



(次頁へ)

「峯さんと私」(水谷さんからのメッセージ)

みなさんは、どんな気持ちで「希寮」を訪れていますか。そして、どんな気持ちで峯さんを見つめているのでしょうか。



「希寮」のお年寄りには、私たちと同じように、「毎日を楽しく過ごしたい。」と思っと思っています。もちろん、峯さんだってそうです。峯さんは、いろいろな事情があつて、家族と遠く離れて「希寮での生活」をはじめました。峯さんは、そういう生活を、もう三年間も続けていっているんです。

「希寮」には、七人のお年寄りがいます。その中で、峯さんは、人と会話することが好きではないようです。私が声をかけても、あまり話そうとはしません。峯さん自身から話しかけてくることも滅多にありません。だから、機嫌がよいのか悪いのか、調子がよいのか悪いのか、はっきりと分からないのが正直なところです。ただ、私は、ホームヘルパーとして、「峯さんが何をしてほしいのか」「どうしたら心地よく感じてくれるのか」って、それだけを考えながら接しているつもりです。

峯さんは、うんちやおしっこで下着や着ているものを汚してしまった時、自分で汚したのに、私(水谷)が悪いみたいに文句を言う時もあるんですよ。そんな時は、「峯さん、今日はどこか寂しいのかな」って思いながら、峯さんのお顔をじっと見つめることにしています。

すると、峯さんは、向こうをむきながら、ぼそつと言う時があるんです。「ありがと」って。あんまりよく聞こえないんですけど、私にとつてすごく嬉しい瞬間です。

私は、その瞬間に、峯さんから大きなエネルギーをもらっているような気がします。「今度、また来るからね」「ようし明日もがんばるぞ」などという気持ちで沸々とわいてくるのです。私が、「ホームヘルパー」という仕事に生きがいをもって取り組めるのは、「ありがと」っていう、峯さんの小さな一言のおかげだと思っています。

さて、これから、みなさんは、峯さんをどんな気持ちで見つめていくのでしょうか。峯さんの心に、みなさんの歌声が響くといいですね。

水谷さんからのメッセージを読み

終えた子どもたちは、「この前の訪問は、感動することもあつたけど、どこ

か他人事っていう気持ちもあつたよ

うな気がする。」「自分たち目線で見て

いて、正直言つて『してあげている感

じ』が強かつた。」などと、儀礼的で

一過性の訪問に過ぎない自分たちの

取組をふり返つていきました。

その中で、美里さんは、自分自身に

問いかけるように、次のように語りま

した。

\*美里さんの語りより\*

峯さんの「淋しさ」はもつとずつと

深いところにあると思う。私たちの一

回や二回の訪問で、そんなに簡単には

変わらないと思う。でも、この訪問を

続けていくことで、峯さんの心の中に

ある「淋しさ」が「愉しさ」や「嬉し

さ」に変わっていく—そんなきつっか

げづくりが私たちにできればいいと

思う。それが、峯さんといっしょに生

きていくつていうことかな…。

人権教育指導方法等の在り方について  
～「第3次とりまとめ」より～

〈体験・交流活動を通して、大切にしたいことは…〉

- 自分で「ふれる」「気付く」こと。
- 他者に「気付く」ことを確かな認識に「深める」こと。
- 自分自身の生き方と関連させ、解決に向け地域社会に「発信する」「行動する」こと。



活動あって学びなしの「体験・交流」  
にならないようにしたいものです。

これから先、子どもたちは、峯さん  
その人に心を寄せて、悩んだり考え合  
つたりしながら、自分たちの「訪問・  
交流活動」を展開していくことでしよ  
う。そして、それを突き動かしている  
美里さんのおもいを受け止めながら、  
「共生社会づくり」の  
一端を担っていくに  
違いありません。

(※文中の人物・施設名は  
すべて仮名です。)





# 「地域素材」を核にした人権教育の推進

## 学習の出発は「石段の穴」と「詩」

H小学校の子どもたちは、自分たちの地域にあるお寺の「石段の穴」(地域素材)に目を向けながら、学習を進めていきました。

俺達の遊び場は  
 観音様の石段と決まっていたっけ  
 五人六人 皆弟や妹を背負って  
 草つきをして遊んだっけなあ  
 あの石段にあいている穴は  
 差別された 俺達の涙の穴だ  
 幸太・義公の嘆きの遊びの穴だ  
 俺達は何も知らぬ七・八軒が  
 何でみんなと遊べないのか  
 たまに友達の家へ行けば  
 親達から わいらの来る所じゃねえと  
 追いかえされてなあ

(小林義雄氏『草つき穴』より抜粋)



今から90年ほど前、被差別部落の子どもたちが、学校の友だちといっしょに遊ばず、観音様のある石段で、近くに生えている草をつみとって、石を使って草をおもちのようにつく遊び(草つき)をしていました。その跡(草つき穴)が、今なお石段のいたるところに残っています。



子どもたちは、差別の悲しみや苦しみ、差別に対する怒りや憤り、そして、差別に負けない強い意志や覚悟など、様々な思いが染み込んでいる「草つき穴」に出会い、ふれあうことを通して、じっくりと学び合っていました。

その中で、子どもたちは、地域の中で差別と闘い続けてきた当事者の方(Sさん)と交流しながら、「草つき穴」をめぐる学習を深めていくことができました。

### —Sさんのお話より—

幸太君や義公君が受けた差別は「部落差別」といいます。差別を受けていた人たちは、昔はお城やお寺の近くに暮らしていました。それは武士のために皮でできた武具を作ったり、お寺の掃除をしたりする仕事をするためです。ですから、地域の人たちにとって、とても大事な役割を持った仕事をしていました。

しかし、当時の人々は、ふだんと違った状態になることを「けがれ」と考え、おそれていました。死、血、災害などが「けがれ」とされ、自然の石を動かすことも「けがれ」と考えられていました。そして、差別を受けていた人たちは、けがれた状態をきよめる力があるとされてきたことから、当時の人々は、「おぼろし」と思ふ気持ちと「おもしろ」と思ふ気持ちの両方を持っていました。

明治時代になり、西洋の文化が日本に入ってきて、人々は革靴を履くようになりました。すると、革靴はよく売れ、皮製品は大きな利益になる商品となったので、次第に皮製品への「けがれ」はなくなり、大きな会社が皮製品を作る仕事をするようになりました。やがて、それまで皮製品を作っていた人たちは仕事を奪われてしまい、当時の人たちの中からは「すばらしい」と思ふ気持ちが薄れ、「おもしろ」と思ふ気持ちだけが残り、差別がひどくなってしまったのです。

だから、部落の人たちは悪くない。差別をする人間が悪いのです。私は、「こんな差別は絶対に許さない」という気持ちで今も闘い続けています。差別をしないのは当たり前。差別をなくす子どもたちになってくれることを是非お願いしたいし、そういう子どもたちになってくれるよう、あの「草つき穴」も喜んでいるのではないのでしょうか。

### 【これからの人権教育は…】

地域社会と学校と家庭が、人権問題を内包している身近な「地域素材」を核として、互いに協力・連携しながら学び合うことを通して、人権が尊重される社会を築いていくことが求められています。



## 〜思いやりから思い合いく〜

昨年暮れ、朝起きると右耳がよく聴こえず、病院で診察を受けた。突発性難聴と診断され、入院して治療を受けたが残念ながら改善されなかった。約三分の人は治療しても治らない病氣らしい。私の場合、人の声がよく聞こえないことや、高音に雑音が混じること、常に耳鳴りのあるという症状があった。

ある日、電車内で三歳位の子どもがいて「かわいいな」と思っていて見ていた。その子どもは段々騒ぎ始め、途中から泣き出した。その声に雑音が混じって聞こえず、苦痛になりその場から逃げ出したくなった。

また、家で子どもたちが騒いでいる声がキンキン響き、思わず「静かにしなさい」と怒鳴っていた。

これらの出来事は私にとって非常にショックな出来事だった。私は教師であり、子どもの声が苦痛に感じるということは致命的だと感じたからだ。

「このまま教師を続けられるだろうか」不安が襲ってくる。「何で自分が・・・」病氣になって、体調不良だけでなく、そのことで気力をなくし、精神的な辛さがあることが初めてわかった。

知り合いから鍼治療を勧められ、暗い気持ちのままある鍼治療院に通い始めた。

ある日、待合室にいと、八十歳位のおばあちゃんが、自動給湯器でお茶をカップに入れて席に戻ってきた。おばあちゃんはお茶を飲むとしたものの、熱くて飲めないようで、しばらくカップを持っていた。

「こんなに熱いのなら冷たいのにすればよかった」とつぶやいた。

すると、隣に座っていた二十歳位の女性が、給湯器でお茶を入れてきて、「おばあちゃん、冷たいお茶でもいいですか？もしよかったら、この冷たいお茶飲んでください。私がおばあちゃんのお茶飲みますから」とおばあちゃんにこやかに声をかけた。

「えっ。でも私口つけちゃったし」と遠慮するおばあちゃん。

「私、全然平気ですから」と若い女性。

「でも悪いよ」

「大丈夫ですよ。おばあちゃん」

「いいよ。いいよ」しばらく考え込む二人。

「それならば、あなたの冷たいお茶、ちよつとこつちのお茶に入れてくれるかな？」とおばあちゃん。

「あつ。そうか。それならちよつとよいお茶ができますね。おばあちゃんナイスアイデア」と若い女性。おばあちゃんが嬉しそうに微笑む。

若い女性は、おばあちゃんのカップをもらうと、少し冷たいお茶をカップに入れ、

「まだ熱いかもしれないから少しづつ飲んでください」と声をかけてカップを渡した。おばあちゃんはお茶を少し口に含んだ。

「おばあちゃん。まだ熱いですか」と心配そうに顔をのぞき込む女性。

「ちよつといいよ。ありがとうね」とにっこり笑うおばあちゃん。

「よかった」と女性の笑顔がこぼれた。

その光景を見ながら、私は自分が情けなくなった。

これまで私は「何で自分だけがこんな病氣に・・・何で自分だけこんな辛い目に・・・」と自分のことばかり考えていた。鍼治療院に来ている人をはじめ、周りの人のことなど少しも見ようとせず、思おうとしなかった自分がいた。おばあちゃんと女性から教えていただいたことを大切にして生きていきたい。

詩人・宮澤章二の『行為の意味』の一節

あたたかい心が あたたかい行為になり  
やさしい思いが やさしい行為になるとき

〈心〉も 〈思い〉も 初めて美しく生きる

——それは 人が人として生きることだ





# お肉を食べるとき考えてみたいこと



「本日のお肉はA5ランクの信州牛です。お肉の甘みを感じてもらうために、塩だけでお召し上がりください。」

「素晴らしいさしの入り方ですね。肉汁があふれ出てきます。これはうまい。かまなくても溶けていきます。」

こんなお肉食べてみたいですね。

このお肉を作り出す一つであり、日本でも最大級の食肉市場が、「東京都中央卸売市場食肉市場芝浦と場」です。山手線品川駅港南口を出ると、目の前に広がるビル街の一角にあります。

皆さんは、毎日のように食べるお肉が、どのように作られるかご覧になったことはありますか。多くの方は、見たことがないのでは、いやかと思いません。この芝浦と場で働いている

栃木裕さん



都会の真ん中にある東京都中央卸売市場芝浦と場

んに、昨年度講演をしていただきました。その中で、と場における作業の様子を映像で見ました。その内容は、豚のと畜解体でした。豚に麻酔をかけ、動脈を切り放血し、皮をはぎ、内臓や枝肉に分けていく様子です。それは、豚が命を絶たれる場面であり、豚肉を作り出す場面でもあります。その時使うナイフはたいへんよく切れ、まったく力を使っていないかのように見事に切り分けられていきました。

この研修会の感想で、一部の参加者の中に、「見たくなかった。」「見なくてもよい映像だった。」というものがありました。普段見ることのない動物を死に追いやる「残酷」な場面だという感情なのでしょう。この感情を出発点に、時には「こんな残酷な仕事をしている人がいる。この人たちは、血にまみれたり死にたずさわったりしているから、けがれている。」と見られることがあるそうです。そうしたことから、と畜の現場は、ケガレ観とかかわって、部落差別と密接につながりがあります。また、今でも、偏見や差別の目が向けられることもあるようです。

このようなと畜の現場ですが、栃木さんたちは職人氣質で「より良い製品をつくるため」日々努力しています。その現場を長野県内の大学生の皆さんが視察に行きました。彼らは、まず栃木さんから、と場が向けられるケガレ観と



学生と意見交換をする栃木裕さん

職業差別や部落差別について話を聞きました。その中で、彼らは、ケガレ観が日常生活において自分の内面に持っているもの(例えば「清めの塩」など)であることに気づいていきました。そして、「差別が自分自身にかかわるもの」と初めて認識した彼らは、実際にと畜が行われる場所に向かいました。

さすがに希望して参加した皆さんなので、放血の瞬間を見るまなざしは、真剣そのものでした。一瞬も見逃さない、顔をそむける人もいない、また、血が飛んできてもひるまない。「いったい自分はどろどろ感ののだろうか」と自分の内面の変化と向き合っている姿でした。また、「自分の中には、ケガレ観が、どのように湧いてきて、それに対峙できるのか」と自問しているようでもありました。自分自身の差別につながる心の揺れを一人一人が感じて向き合う、意義のある研修になったのではないのでしょうか。今回の視察を終えての感想を紹介します。

「人は人以外の生物を食べ、栄養を取らなければ生き延びることはできない。だったら少々発達した大脳で、この世に生を受け、私たちの口に入るまでの生物の流れを知っておくべきだと思っ。」

「見たくないものにふたをする」のではなく、そこに働く人に会い、思いを知ることが、差別をなくすことにつながるという、彼らの姿から学ぶことができました。

東信教育事務所では、栃木裕さんのお話をお聞きする会を、7月30日に行います。

興味のある方、と場の視察に行きたい方など、お気軽にお問い合わせください。

(問い合わせ先)

0267-31-0252 生涯学習課まで



# ほらっ、人権の花が咲いたよ! ~ある学校でのエピソード~

## 根っこ

昨年の十一月、北信地区のT中学校の人権教育まとめ集会を参観する機会に恵まれた。

集会の中では多くの生徒達が、全校の前で自分の思いを堂々と語り、他の生徒達は友の発言を聴く、すばらしい内容だった。

後日、人権教育主任のA先生から学校通信をいただいた。タイトルは「根っこ」。まとめ集会でのOさんの感想が掲載されていた。(下段参照)

そこに綴られている「自分から立ち上がりたい」というOさんの姿から、「差別は絶対に許さない」という並々ならぬ覚悟がOさんの心根にあるように感じられた。そして、このOさんの心根こそ、人権を尊重する社会を築いていくための「根っこ」であろう。この大切な「根っこ」を育てるために、T中学校では個別の人権課題に目を向け、三年間を通して丁寧に学習していく指導計画を作成し、系統的に授業を実践してきた。

中学校生活は、自分を成長させるた

めの「根っこ」を育てる時期かもしれない。A先生の学級通信には、「生徒達がたくて強い『根っこ』を育ててほしい」という願いが込められている。そして、生徒達は、その「根っこ」を少しずつ、着実に育ててきている。

一年生の『ちがいのちがい』から、二年生の『部落差別』の学習を思い出すことができました。三年生になって新たに『結婚差別』について学習して、各学年の学習発表は内容が濃くて、今までの学習は将来に伝えるべきものだと思うし、とても大切なものだと思います。誰かが立ち上がるのを待つんじゃないで、自分から立ち上がりたいと思えました。差別されている人、困っている人がいたら自分から立ち上がりたし、先輩に教えられることがあったら今のつちに教えてあげたいと思います。家族ともよく相談して、意識を高めたいと思います。

(Oさんの感想より)

## いまここから 自分から 人権教育リーフレットの実践から

「どうしてこんな大きな穴が空いたのかな?」

「草つきやつてみたけど、1回、2回じゃこんな穴できないよ」

H小学校の4年生が、草つき体験をしたあとの言葉です。

この草つき穴は、今から90年ほど前被差別部落の子どもたちが学校の友だちと一緒に遊ばず、観音様のある階段で近くに生えている草をつみとって、石を使って草をおもちのようにつく遊び「草つき」をしていた跡です。



にしたい。  
草つき体験した後、資料「草つき穴のお話」を読んだ子どもたちからさらに

「草つきは、遊びじゃない。穴に悔しさをぶつけていたと思う」などと、当時、差別やいじめをうけてきた子どもたちの悲しみや苦しみに寄り添う姿が見られました。

その後も、資料「草つき穴のお話」を読み、語り合い、ふり返る学習の中で、「差別やいじめをしてはいけない」とわかっていくが、周囲のことが気になって行動に移せそうにない自分自身に気づいていきました。

そして、自分と向き合い続けながら、クラスの中で、よりよい人間関係を作っていくとすると意欲と実践力を醸成していきました。

また、子どもたちは、資料「草つき穴のお話」に綴られている事実や背景に目を向ける中で、同和問題を自分たちの身近にある人権課題として見つめはじめています。

### 「いまここから 自分から」

H小学校では、学習の過程で、何度も「草つき穴」のある場所に出かけ、当事者の思いを感じ、学習をづけています。

- ① 地域教材に出会い、ふれあう「実体験」を通して、はつとしたり、心をふるわせたりする学習をしたい。
- ② 日常的に起きている様々な事柄との「つながり」の中で同和問題について考えたい。
- ③ 心情面の醸成を図りながら、時間をかけて「じっくり」と学べるよう

# 人権講演会を引き受けます! ~派遣依頼は「心の支援室」まで~

啐啄の機

「優つた」思いやりを

(人権教育推進員)

「あなたが空しく生きた今日は、昨日死んで逝った者があれほど生きたいと願った明日なのです。」(韓国チヨ・チャンイン作「カシコギ」より)

私の講演のタイトルは、いつも同じもの「啐啄の機」(そつたくのき)、そして私自身の座右の銘でもあります。お話させていただく度に、参加いただいた方々との出会いに感謝しつつ、今日を生きる大切さ、価値をはたして共有していただけたであろうか。一つ一つの言葉の重みをいつも反芻しています。緑寿(ろくじゆ)の齢(よわい)となり今まで育てていただいたことへの十分な恩返しではないかかもしれないが、冒頭の「カシコギ」の小説で問うているように、「命ある私たちは自分の命を精一杯輝かせる使命がある」という、今を生きる実感を共有したいと心から願ってお話しさせて頂いています。それが、機を得て両者相応じる得難い好機、つまり「啐啄の機」の意味合いであると思っています。

去年、不覚にも長野駅構内で転んでしまい、救急車で搬送された貴重な(?)体験、そしてN病院での全身麻酔体験、オペ後、我に帰ったらアララ(!)愛着のあつた歯が三本抜かれていたショック、結局一週間の入院と相成ってしまった中で、更に私にとって大変貴重な体験に出つくわすことになりました。入院三日程経った頃、とても心地よい気持ちになっていることに気付いたので。病室の清潔さ?同室の患者仲間?それとも看護スタッフの技術?確かにどれも大変満足していましたが、この快い気持ちはそれらのどれでもなかったのです。それは、医師、看護師、清掃担当のスタッフの方々が、あらゆる「時」、「場所」、「場面」で発していた言葉、「ありがとうございます。」でありました。診察、検査、身の回りの始末に至るまで実に良く面倒を見て頂き、更に両者で交わされる感謝の言葉、病室内はいつも「アリガトウゴザイマス」で一杯だったのでした。言葉の至宝「ありがとう」は、今を生きる私達にとってまさに心の安らぎをあたえてくれる言葉であったことを再認識した次第です。

続きは、講演会でお会いした時に。

# インターネットによる人権侵害を予防しましょう ~長野県総合教育センターからのお知らせ~

## 人権に配慮した 情報モラル教育を!

「心を磨く」指導は十分だろうか?



- ・ 安全に生活する「知恵を磨く領域」は、総合教育センターホームページ内にある「**情報モラル・著作権 実践資料**」が活用できます。**事例**を提示し、**問題点**を考え合い、**解説**で学習のねらいを見返します。
- ・ 「心を磨く領域」では、様々な場や機会を利用して、相手に対する思いやりをもつことを実感できるようにしていきましょう。「情報モラル」も「日常モラル」もまったく同じです。
- ・ 人権に配慮して「I am OK. You are OK.」の心で、他人や社会とどう関わっていったらよいか、予防的な指導を継続していくことが大切です。

今、「情報モラル教育」を発達の段階に応じて体系的に推進していく必要性、学校だけでなく地域や家庭・地域との連携を図りつつ、情報モラルを身に付けさせる指導を適切に行う必要性が問われています。  
(文科省「教育の情報化に関する手引」より)

## コラム

## 学校と家庭と地域をつなぐ学習資料

子どもたちの豊かな学びと健全な育成の充実を図るためには、学校・家庭・地域がそれぞれの役割を自覚し、連携・協力しながら、地域社会全体で子どもたちの育ちを支援していくことが大切です。【文部科学省「第三次とりまとめ」より】

そのために、みんなが共通の学習資料(読み物)にふれて、あちらこちらで話題にしていくことにより、学校・家庭・地域が協働して、人権教育を推進するための環境の下地をつくってみてはいかがでしょうか。



## 「お風呂でGYM」

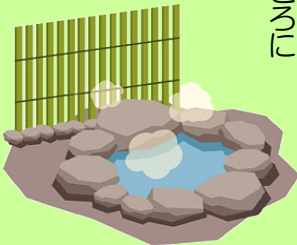
入浴中、隣で身体を洗っていた外国の女性が、いきなり、「背中を流してあげましょう」と手振りでご合図をしてみました。

外国の人とは背中を流し合ったことのない私だったので、全くびっくりしてしまい、一瞬ごまごましましたが、とってもしつこくなりました。

結果的には、彼女の行為に甘えてしまい、ほのぼのとした気分になったことができました。

驚いたのは、その直後のこと。年配の人が彼女のいたところに

5〜6杯の湯を、  
じゃんじゃんかけ  
てから座ったこと  
でした。



これは、ある温泉でのできごとです。この温泉街の近くには、たくさんの中企業があり、そこで外国人が労働者として働いています。外国人は、あまり温泉を利用する習慣はありませんでした。日本での生活に慣れるにつれ、温泉は一日の疲れを癒やす場所として、また、日本の生活習慣を知る場所としても大きな役割を担っていることがわかりました。

近所の顔見知りの方たちがお互いに声をかけ、背中を流し合うという日本的な習慣が自然に身についてきたのでしょう。いつとはなしに顔見知りになった外国人から、ある日突然「背中を流しましょうか」と声をかけられ、びっくりしてしまったのです。そうして、背中を流し合い、自国のことや仕事の様子など、たどたどしい会話でしたが心あたたまる一時を過ごすことができました。

ところが、その直後、年配の方が、今まで彼女がいたところに、これ見よがしにお湯をかけたのです。今までのうれしかった気分が一瞬にして吹き飛ばされてしまい、寂しい気持ちになったのです。

同和警察 社会教育第九課 長野県教育委員会より提供

## 教育事務所主催・人権教育研究協議会(研修会)のお知らせです。

- 南信教育事務所「身近なところから考えましょう」 期日：6/27(木) 場所：伊那市いなっせ
- 中信教育事務所「人権課題の“いま”を学び合いましょう」 期日：7/8(月) 場所：松本合同庁舎
- 東信教育事務所「学校の教師も共同参画！(地域社会と学校がつながり合う研修会)」 期日：7/9(火) 場所：佐久勤労者福祉センター
- 北信教育事務所「一人一人が大切にされる共生社会をめざして学び合いませんか」 期日：7/11(木) 場所：千曲市更埴文化会館
- 南信教育事務所飯田事務所「地域社会と学校で共に考えましょう～身近な人権～」 期日：10/28(月) 場所：飯田合同庁舎

※詳細は、県のHP (<http://www.pref.nagano.lg.jp/kyouiku/kyougaku/jinken13.htm>) をご覧下さい。



# 人権意識の高揚を目指す作文とポスター (平成24年度入選作品より)

## 作文の部

《最優秀賞》あきつめるな!

富士見町立境小学校(平成24年度)四学年 深町晃大さん  
三人がかりで一人をいじめている。そんなけんかを見ました。

ぼくは「助けてい。」と思いました。しかし、出来ずにつつ立っていました。金しばりにあったかのようになり、動かせませんでした。ついに、見て見ぬふりをしていました。

いじめがおわると、いじめた人は、「あくすつきりした。」と言いました。そして、いじめられていた人になちがくと、けられました。「むねがくるしい。」という気持ちもぼくにつたりました。その時「やっぱりあの時言えば。」と思いました。

そして次の日、同じいじめを、また見ました。そして「同じことをくりかえしてはいけない。」と思い、「やめろ。」と言いました。やめました。しかし今度はぼくにやってきました。でも、にげませんでした。いじめられていた人をにがすまで。いじめられていた人はにげていきました。

ぼくは、いじめている人とけんかをしました。なぐり合いになりました。そこに先生が来てけんかをしていた人は、にげていきました。そこでチャイムがなりました。ぼくはホッとしました。そこでチャイムがなりました。

このとき、「しつぱいをくりかえさない、それが大切だ。」と思いました。そうすれば勇気も出ると思っています。

これからも「くりかえさない」をつづけていきたいです。



## ポスターの部



《優秀賞》 須坂市立墨坂中学校  
(平成24年度)2学年 宮本莉乃さん



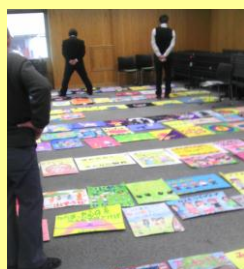
《最優秀賞》 中野市立日野小学校  
(平成24年度)1学年 服部太樹さん



《優秀賞》 上田市立長小学校  
(平成24年度)2学年 宮下梨子さん

平成24年度は〈作文の部〉71点、〈ポスターの部〉443点の応募がありました。その中から優秀作品を選定しました。

入賞作品は、ポスターや各種啓発資料等に掲載します。



〈選考会の様子〉

# 平成25年度 長野県人権教育リーダー研修会を開催します

= 皆さまのご参加をお待ちしています =

全体講演 10:30-12:20

- 【講師】<sup>ありよし みちこ</sup>有吉 美知子 さん 〈すそ花法律事務所 弁護士、長野県人権政策審議会委員〉  
【演題】「子どもの権利を保障することの意味 ～子どもが安心して生きていくために～」  
【内容】いじめ・体罰・子どもへの虐待などを無くすにはどうしたらよいか、権利侵害を受けている子どもたちを救済するにはどのようにしたらよいか、いっしょに考え合います。



課題別分科会 13:15-15:55

【第1分科会】同和問題について考える

講師：<sup>たかぎ みよし</sup>高木 美好 さん 〈部落解放同盟長野県連合会財務委員長〉  
内容：古文書から被差別部落の歴史を見つめ、そこに生きた人々のあり様について考え合います。

- 【第2分科会】中国帰国者の人権を考える 講師：<sup>おおはし はるみ</sup>大橋 春美 さん 〈飯田市立山本小学校教諭〉  
内容：中国帰国者に対する偏見や差別意識の現状と共生社会のあり方について、ご自身の体験をもとにお話しいただきます。

【第3分科会】アイヌの人々の人権を考える

講師：<sup>わたなべ みつこ</sup>渡邊 美津子 さん 〈喬木村立喬木第二小学校教諭〉  
飯田カネト合唱団の方々

内容：「飯田カネト合唱団」の取組を紹介していただきながら、アイヌの人々の歴史や文化、伝統について学び合います。

【第4分科会】企業の社会的責任（CSR）について考える

対談／講師：<sup>はしもと きょうこ</sup>チャンゼリゼ美容室 橋本 京子 さん（社長）  
<sup>きたはら あやこ</sup>北原 綾子 さん（店長）  
<sup>くるみざわ てるひこ</sup>栄村立栄中学校教諭 胡桃澤 輝彦 さん

内容：栄中学校への支援活動を続けているチャンゼリゼ美容室の取組と生徒たちの姿、そして、橋本社長による「命の授業」を通して、共に生きる私たち自身の心のあり方について考え合います。

【第5分科会】語り合い気づこう人権

講師：<sup>もろさわ ひろき</sup>両澤 宏樹 さん 〈北信教育事務所生涯学習課〉  
内容：「参加型」「体験型」「協力型」の学習を通して、身近な人権について学び合います。

中南信公会場  
総合教育センター

9・6（金）

全体講演 10:30-12:20

【講師】<sup>いらい まつよ</sup>岩井 まつよ さん  
〈コンテンツビジョン代表取締役  
長野県人権政策審議会委員〉

【演題】「人権におけるメディアの役割」  
【内容】激しく変化しているメディア環境。マスメディアの送り手は、人権について何を思いながらコンテンツを送り出しているのでしょうか。ある放送局の報道制作現場の取組を紹介しながら人権教育を考えます。

課題別分科会 13:15-15:55

【第1分科会】同和問題について考える

講師：<sup>あせがみ かずやす</sup>畔上 一康 さん 〈信州大学教育学部附属長野小学校副校長〉  
内容：同和問題の真実に対峙する教師の営みと子どもたちの学びのあり様を授業の具体を通して語っていただきます。



- 【第2分科会】子どもの人権を考える 講師：<sup>はた けんじ</sup>秦 健二 さん 〈NPO法人遊び塾代表理事〉  
内容：「どうしていじめちゃいけないのか」—ご自身の体験を語っていただくことを通して、いじめ問題に本気で向き合う私たち自身のあり方を問い直します。

【第3分科会】アイヌの人々の人権を考える

講師：<sup>わたなべ みつこ</sup>渡邊 美津子 さん 〈喬木村立喬木第二小学校教諭〉 飯田カネト合唱団の方々  
内容：「飯田カネト合唱団」の取組を通して、アイヌの人々の歴史や文化、伝統について学び合います。

【第4分科会】犯罪被害者の人権を考える

講師：<sup>なかじま としのり</sup>中島 敏徳 さん 〈NPO法人長野犯罪被害者支援センター事務局長・犯罪被害相談員〉  
<sup>みやた ゆきひさ</sup>宮田 幸久 さん <sup>みやた もとこ</sup>宮田 元子 さん 〈長野県人権教育講師派遣事業の講師〉  
内容：中島さんからは、被害者に対する支援についてご紹介いただくとともに、宮田さんご夫妻からは、ご自身の体験をもとに、子どもを失った親の願いを語っていただきます。



- 【第5分科会】語り合い気づこう人権 講師：<sup>しおざわ ひでひこ</sup>塩澤 秀彦 さん 〈南信教育事務所生涯学習課〉  
内容：「参加型」「体験型」「協力型」の学習を通して、身近な人権について学び合います。

東北信公会場  
千曲市更埴文化会館